



執筆要領(II)

-日本語原稿の作成-

河地利彦¹・藤原正幸²

Instructions to Authors (II)

-Preparation of Japanese Manuscripts-

Toshihiko Kawachi¹ and Masayuki Fujihara²

Abstract: Instructions are given to prepare the manuscript of a Japanese paper submitted to the *Journal of Rainwater Catchment Systems*. Being a model in itself, the document demonstratively prescribes the layout of the manuscript. Manuscripts should be typed on one side of white A4 size paper when they are submitted. Accepted manuscripts will be off-set printed. Titles of papers, names and affiliations of authors, abstract, keywords, main texts, headings, references, equations, mathematical symbols, captions of figures and tables and so on should be in specified fonts. All references cited should be collected together at the end of the paper. Figures and Tables with their captions should be placed appropriately.

Keywords: Journal; Manuscript; Japanese instructions; Rainwater; Hoover Dam

1 はじめに

本稿は、日本雨水資源化システム学会誌日本語論文原稿作成の手引である。この原稿自体が、「MS-Word」による原稿作成のテンプレート(論文原稿のレイアウト、使用するべきフォントのサイズやスタイルの例)となっている。なお、査読を効率的に行うために、投稿原稿には10行ごとに番号をつけることとする。

論文の原稿枚数は原則として6枚以内とする。受理された論文は、そのままオフセット印刷される。

2 レイアウト

原稿には、A4版白色用紙の片面を使用する。上下のマージンは25mmとする。フォントは、漢字、ひらがな、カタカナについてはプロポーショナルの明朝体全角(MS-P明朝など)を、英数字についてはTimesなどの代表的ローマン体半角を用いる。日本語と英数字の間隔は自動調整しない(「段落」→「体裁」→「文字幅と間隔」のチェックをはずす)。和文と英数字等の句読点には「、」、「。」を用い、「、」、「。」は用いない。

原稿の第1ページ最上部には、編集委員会指定のヘッダーを配置する(?部分は委員会において記入)。ヘッダー中央の枠には、論文の種類に応じて、Original Paper, Technical Paper, Review Paper, あるいはTechnical Note/Reviewを12ptフォントで記入する。

論文は、表題部、本文からなり、必要に応じて謝辞と引用文献の一覧を含む。また、数式、図、表が含まれていてもよい。本文に対する脚注、付録は用いないこと。

2.1 表題部

表題部は一段組で、論文の表題、著者名、Abstract、キーワードからなる。Abstract以外は中央寄せで和英併記する。Abstractは75~200語、両端揃え、自動ハイフネーション(「ツール」→「その他の校正ツール」→「ハイフネーション」で「単語を自動的に区切る」にチェックを入れる)使用で英文のみ記載する。キーワードの数は10個以下とし、英語表記のものをセミコロンで区切って記載する。左右のマージンは30mmとする。連載形式の論文には、(I), (II), ...のように番号を付け、その下に副題を添える。前置詞、接続詞、冠詞を除く各英単語は一文字目を大文字表記とする。著者の所属、住所は、略称などは用いず、脚注に和英併記する。各著者との対応にはアラビア数字を用いる。表題部で使用すべきフォントを表1に示す。

表 1: 表題部のフォント

表題	13pt	ゴシック
副題	10pt	
著者名	11pt	
Abstract	9pt	
Keywords	9pt	イタリック
所属	8pt	

2.2 本文

本文は、左右各段幅85mm、段間隔8mmの二段組とする。左右のマージンは16mmとし、両端揃えする。フォントは10ptのものを用いる。用語を強調するため、「」を用いてもよい。行間隔は「書式」→「段落」→「インデントと行間隔」で「固定値:12pt」に設定する。

見出しは第3レベルまで用いることができる。それらは左寄せし、小数点で区切った番号をつけ、10ptのゴシックフォントを用いる。各見出しの上には1行の空白行を置く。

¹ 京都大学大学院農学研究科教授, Professor, Graduate School of Agriculture, Kyoto University, Kitashirakawa-oiwake-cho, Sakyo-ku, Kyoto 606-8502, Japan

² 愛媛大学農学部教授, Professor, Faculty of Agriculture, Ehime University, 3-5-7 Tarumi, Matsuyama, Ehime 790-8566, Japan (Corresponding Author) E-mail:rain@rainwater-u.ac.jp

2.3 引用文献

文献の引用に際しては、著者名と発行年を明記する。著者が3名以上の場合には、第2著者以降を「ら」(日本語文献の場合)あるいはイタリックの「*et al.*」(外国語文献の場合)で置き換える。

引用したすべての文献は、筆頭著者の姓のアルファベット順に配置し、9ptフォントを用いて論文の末尾に置く。そして、[1], [2], ...のように番号をつける。見出しは10ptゴシックで引用文献とする。

2.4 数式と数学記号

各数式は、欄幅でセンタリングすることを原則とする。数式には(1), (2), ...のように番号をつける。この番号は、数式の行(2行以上にわたる場合は最後の行)に右寄せして配置する。数式を本文から分離するため、その上下にそれぞれ1行の空白行を置く。

数式が長く、途中で切断する場合は、各行の間に半行の空白行を入れる。

数学記号を本文中で用いる時には、数式中と同じフォントを用いる。また、それが変数を表すときは斜体とする。

2.5 図と表

図(写真を含む)と表は、初出のページに置くことを原則とするが、次のページに繰り込むこともできる。すべての図や表を論文の末尾に置くことは避ける。

図中または表中で使用するフォントは、本文に準ずる(日本語は明朝体全角、英数字はTimesなどのローマン体を使用)。

2.5.1 図と写真

図は、写真も含め、そのままオフセット印刷されることを考慮した鮮明なものに限る。このため、特に図については、ドロー系(ベクトル系)で描画することを推奨する。すべての図(写真を含む)には、本文中での出現の順に、図 1, 図 2, ...のように番号をつける。説明文は10ptフォントを用い、図の下に置いて、図幅でセンタリングする。

2.5.2 表

すべての表には、本文中での出現の順に、表 1, 表 2, ...のように番号をつける。説明文は10ptフォントを用い、表の上に置いて、表幅でセンタリングする。

3 章の次に続いて節が来る場合は空行を入れる

3.1 例

以上に則して作成された原稿の例を以下に示す。

Lions(1968)によって線型システムはこれまでに解析がなされている(Liu *et al.*, 1992; Liggett and Chen, 1994)。洪水のピーク時には、湧出強度 q は

$$q = q(\theta) = 64.7 + 0.00017\theta + 4.76\theta^2 + 3.92\theta^3 - 0.40\theta^4 + 29.03\theta^5 \quad (1)$$

によって評価される。ここに、 θ =温度である。連続方程式は、「状態方程式」と呼ばれ、

$$\Delta V = q \quad (2)$$

のように書かれる。ここに、 Δ =ラプラス演算子、 V =速度ポテンシャルである。大東ら(1996)によって提案された手法を用い、図 1 に示す変換された計算格子において式(2)を数値的に解く。

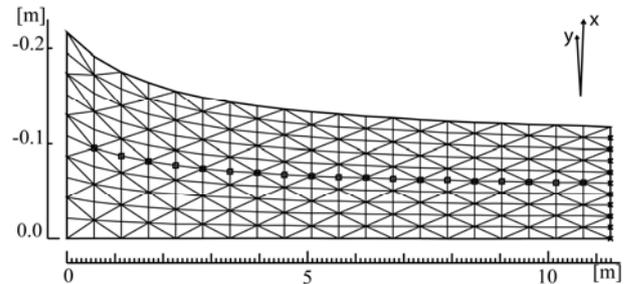


図 1: 説明文が1行の場合、図幅で中央揃えとする。複数行の場合、1行目は図幅とし、2行目からはぶら下がりインデントで「コロンの次の文字」に合わせる。表の説明文も同様とする。

4 おわりに

日本雨水資源化システム学会誌に原著論文を投稿する際の手引を示した。この執筆要領に従って作成され、かつ、審査を通過した原稿のみが論文として掲載される。本稿は日本語原稿用であるので、英語原稿の作成に際してはInstructions to Authors (I) by Kawachi and Fujihara(2004)を参照されたい。

謝辞

最終章の後に謝辞を書くことが出来る。謝辞及び引用文献の見出しに番号は不要である。

引用文献

- [1] 大東憲二・植下 協・市川悦男 (1996): 掘削構造物周辺の地下水流動状態保全に関する研究, 土木学会論文集, 535(III-34), pp.13-21.
- [2] Kawachi, T., and Fujihara, M. (2004): Instructions to Authors (I) -Preparation of English Manuscripts-, *JRCSA*, 13(1), pp.1-10.
- [3] Liggett, J.A., and Chen, L. (1994): Inverse transient analysis in pipelines, *J. Hydr. Engrg., ASCE*, 120(8), pp. 934-955.
- [4] Lions, J.L. (1968): *Contrôl Optimal de Systèmes Linéaires*, Dunod, Paris, pp.34-89, (in French).
- [5] Liu, F., Feyen, J., and Berlamont, J. (1992): Regulation of unsteady flow in open channels, *J. Irrig. and Drain. Engrg., ASCE*, 118(10), pp.674-689.
- [6] 松原茂樹・加藤義秀・江川誠二 (2008): 英文作成支援ツールとしての用例文献システム, 情報管理, 51(4), pp.251-259, doi:10.1241/johokanri.51.251. <http://joi.jlc.jst.go.jp/JST.JSTAGE/johokanri/51.251>, (参照2008-08-15).
- [7] 中央教育審議会: 教育振興基本計画について, 文部科学省, 2008-04-18, <http://www.mext.go.jp/meu/shingi.html>, (参照2008-08-13).

この論文の公開の質疑または討議は????年??月??日まで受け付けます。